

天眼

芸術はあらゆる分野に

残暑と台風の中、日本美術教育学会静岡大会で「科学と技術と芸術」と題して講演した。副題は「学校教育におけるアートの役割」。150人ほどの会員が熱心に聞いてくれ、夜まで議論が続いた。初等中等教育で芸術教育が重視されていない状況に危機感を持つ人が多かった。あらゆる分野で芸術の役割は大きい。教育で芸術の位置づけがしっかりしていないと国が滅びる。

例えば、小学3年で自分の表札を木彫で作る授業で遅れた児童が、家で続きをやる了解をとり、休み明けに完成させてきたとき、「面白かった。でも少しずつ彫っていたら、遊んでばかりいないで勉強しなさいと親におこられた」と報告したという話があった。これが示すように、木

彫は遊びであり勉強ではないという親の考えには二つの問題点がある。その一つは美術の木彫は「遊び」であるとの見方であり、あえて言えば、それがさらに「悪」という見方であるという点である。

遊びは人類の持つ基本的特質の一つである。「遊びをせんとや生まれけん 戯れせんとや生まれけん 遊ぶ子ども声聞けば 我が身さへこそ揺るがるれ」と、後白河法皇によって編まれた『梁塵秘抄』にあるように、遊びのために生まれている人類である。小学校で遊びの本質を身につけておいてほしい。さらにそれが「勉強」ではなく「学習」であってほしいと思う。



ことであり、中国語でもそのように使う言葉である。自らの意思で学ぶという「学習」が大切である。しかも学習は進学の道員であっては

ならない。美術に限らず、「学ぶ」ことが、今は非常に狭くとらえられている。文部科学大臣が「主要教科」と発言する。メディアでも当たり前のようにその言葉を使う。日本政府は、学校教育における芸術文化の振興をうたっている。文部科学省は「2020年に向けた文化政策の戦略的展開」の「重点戦略2」の「重点的に取り組むべき主な施策」で、「子供たちのコミュニケーション能力の育成に資する文化芸術に関する体験型ワークショップをはじめ、学校における芸術教育の充実」を掲げる。また、文化庁は「文化芸術による子供育成総合事業」を推進している。2018年3月6日には「文化芸術推進基本計画」が閣議決定され、基本計画の「第2 今後の

尾池 和夫

文化芸術政策の目指すべき姿で「文化芸術の創造・発展、次世代への継承が確実に行われ、全ての人々に充実した文化芸術教育と文化芸術活動の参加機会が提供されている」とある。

私は1947年に小学校へ入学した。複数の研究者による提言「創造的な未来へ」（1996年）によると、戦後の美術教育は、民主主義の理想と芸術の役割を重視した思想で出発した。元文部大臣森戸辰男は、調和のとれた人間形成のために美術教育の果たす役割を強調し、また美術教師の団体は、美的情操の教育が道徳の基盤であること、デザイン教育が産業の振興に不可欠であること、感覚の陶冶が科学技術の基礎であることなど、美術教育の意義を訴えた。現在、小、中、高等学校における美術教育は、主体的に学ぶ力、思考力、想像力、創造性、表現力、意欲と自信、感性、愛情、生きがい

などを育てていくために積極的な役割を果たしているときれている。また、障害のある子どもにとって、造形という行為を通して表現の喜びや達成感を味わい、機能訓練や社会的なつながりの発達に貢献する美術教育の役割が欠くことのできないものであるとしている。

それとは裏腹に、初等中等教育の現場では芸術分野の教員の多くが非常勤講師になり、授業時間も教員のポストもほとんど「主要教科」によって押し出されている。小学校では専門の教師が少なく、中学校では時間数が削減されている。高等学校でも常勤教師が大きく減っている。政府の方針が実質を伴うように、具体策が早急に進んでほしいと私は願っている。

(京都大名舎教授、地震学)